

「てみる」と「(よ)うとする」

— 「ル形」の言い切りの形における接近と異なりに着目して—

永谷直子

要旨

本稿は、主節の「てみる」と「(よ)うとする」の「ル形」の言い切りの形における重なりと異なりを考察した論考である。両者の重なりとしては、<出来事の未生起>という共通した意味を持つという点が挙げられる。両者の異なりとしては、1)<出来事の未生起>という意味が生じる背景の異なり、2)人称制限の異なり、3)視点の異なり、の三点を取りあげた。1)について、<出来事の未生起>という意味を有するのは、「てみる」は「非過去」というテンス的意味、「(よ)うとする」はアスペクト的意味によるという違いがある。2)について、「てみる」は動作主に三人称を、「(よ)うとする」は一人称をとることができない。この人称制限は、「ル形」の言い切りの形が持つモダリティの意味と、各形式の基本義との間に起こるコンフリクトが原因である。3)については、「てみる」が動作主の視点で、「(よ)うとする」は観察者の視点で述べるという、視点の異なりがあることを明らかにした。「てみる」と「(よ)うとする」の視点の違いは、内側からの視点で述べる場合と、観察者として外側から述べる場合とを言語的に区別する、という言語現象の一つとして位置づけうる。

キーワード：てみる、(よ)うとする、ル形、人称制限、視点

1. 問題のありか

日本語学習者による日本語の文には、しばしば、(1)のような、「てみる」と「(よ)うとする」との混同が見られる。

- (1) 降りる人の迷惑も構わずに多ぜいの人々が混んでいる車の中に押し入ろうとする。乗ろうとする方は力いっぱい押しながらどんどん中の方まで進んでいすを探してみる。(→探そうとする) (アメリカ、3) (市川 1997)¹

「てみる」と「(よ)うとする」は、日本語教育の現場において、共に「try to～」という訳語があてられることがある。² 「てみる」と「(よ)うとする」の違いについて、Makino & Tsutsui(1986)は、(2)(3)の例を挙げ、(2)は、「着た」ことを表すのに対し、(3)は「着られなかった」、あるいは「着なかった」

¹ 〈 〉には、市川(1997)に従い〈国籍、日本語学習歴〉を記す。3は学習歴1~2年意味する。なお、問題を明示的にするために、今回問題にする箇所以外の誤用は修正して引用する。

² Makino & Tsutsui(1986)では、「てみる」に「do s.t and see」「try to do s.t」(引用者注：s.tはsomethingの意)との訳語を当て、類義表現として、「(よ)うとする」を「~yo to suru means simply 'try to do s.t.」として挙げている。

ことを含意する、とし、「タ形(past tense)」における違いを指摘している。主節の「タ形」では、両者は、<出来事の生起の有無>という点において、明らかな違いがあると考えられる。

- (2) ブラウンさんはトムのシャツを着てみた。

Mr.Brown tried Tom's undershirt on.

- (3) ブラウンさんはトムのシャツを着ようとした。

Mr.Brown tried to put Tom's undershirt on.

しかし、(1)のような「ル形」の場合、<出来事の生起の有無>という点においては、「てみる」と「(よ)うとする」の違いは明確ではない。(4)(5)のような「ル形」の場合、「てみる」と「(よ)うとする」はいずれも、基準時において、出来事は生起していないのである。

- (4) 今日はお天気も良いので気分転換にバイクで少し出かけてみます。

(BCCWJ : OY15_22602)³

- (5) 私の娘は2歳になったばかりです。言葉も色々話す様になりましたが、まだ訳の分からない言葉が沢山あります。多分保育園で習ったと思うのですが、一生懸命私に伝えようとします。(BCCWJ : OC10_01435)

ただし、(4)(5)は、「出来事が生起していない」(=<出来事の未生起>)という点では共通するものの、「てみる」と「(よ)うとする」は互いに置き換えができない。その理由は、人称制限にあると考えられる。動作主が一人称である(4)'は「(よ)うとする」を用いることができず、三人称である(5)'は「てみる」を用いることができない。このような人称制限は、「する」には見られないものである。

- (4)' 今日はお天気も良いので気分転換にバイクで少し 出かけてみます / *出かけようとしませす / 出かけます}。(BCCWJ : OY15_22602)

- (5)' 私の娘は2歳になったばかりです。言葉も色々話す様になりましたが、まだ訳の分からない言葉が沢山あります。多分保育園で習ったと思うのですが、一生懸命私に { ?伝えてみませす / 伝えようとします / 伝えます}。(BCCWJ : OC10_01435)

このように、主節の「ル形」において、「てみる」と「(よ)うとする」は共通点と相違点とがある。(1)のような主節の「ル形」における「てみる」と「(よ)うとする」の言い切りの形(以下、「てみる。」、「(よ)うとする。」と表記する)で混同があるのは、両者が<出来事の未生起>という点で共通しているためであることが予想される。(1)の不自然さを説明するためには、「てみる。」、「(よ)うとする。」が表す<出来事の未生起>の内実を明らかにしなければならない。その上で、その違いと「てみる。」、「(よ)うとする。」の人称制限との関わりを考える必要がある。

このような問題意識を持ったうえで、(1)の不自然さを説明する手がかりを探ることが本稿の目的である。本稿では、主節末に表れる「てみる。」、「(よ)うとする」を考察の対象とし、2では<出来事の生起>という観点から、「てみる。」、「(よ)うとする。」の相違点を明らかにする。さらに、3では、人称制

³ 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の用例は(BCCWJ:サンプル番号)と記す。また、複数の形式を比較する場合は実際に用いられた用例に下線を引く。

限という観点から、「てみる。」「(よ)うとする。」を考察する。さらに、4では、人称制限と視点の関係を考え、人称、視点のずれと(1)の不自然さとの関わりをみる。

2. <出来事の生起>から見る「(よ)うとする」と「てみる」

本節では、「てみる。」「(よ)うとする。」が表す<出来事の未生起>の内実について、「する。」との相違を通して、考察する。

2.1 「する。」と「(よ)うとする。」

「(よ)うとする」は、金田一(1976)において、「ある動作・作用が起こらないが、起こる前の状態にある」ことを意味する「将然態」とされている。「起こる前の状態にある」⁴とは、裏返せば、「出来事が生起していない」ことを表す。(6)を見られたい。

- (6) ゲシュタポの男たちが、あわてて銃を {取り出そうとする/取り出す}。

(BCCWJ:LBr9_00221)

「取り出す。」は「ひとまとまり」の出来事として述べるのに対し、「取り出そうとする。」とした場合は、実際に、「取り出す」という出来事は生起していない。「しようとする」は、「起こる前の状態」という局面を述べている。

このように、「する。」と「しようとする。」は、「しようとする。」が動きの局面について述べるという点で異なり、(広義の)アスペクトにおける違いである。「(よ)うとする。」の表す<出来事の未生起>とは、「(よ)うとする」のアスペクト的意味による。

2.2 「する。」と「してみる。」

「してみる。」と「する。」には、「(よ)うとする。」とは違い、アスペクトにおける異なりはない。

- (7) 手術の翌々日、赤坂に出る用があったので、P病院に {寄ってみる/寄る}。

(BCCWJ:LBn9_00065)

- (8) もう一度「由くん、由くん」と、ちょっと大きめの声で {呼んでみる/呼ぶ}。(BCCWJ:

PB19_00167)

(7)(8)で「してみる。」と「する。」はいずれも「寄る」、「呼ぶ」という出来事を「ひとまとまり」として述べている。「てみる」は、高橋(1976)で「ためしにする動作を表す動詞」とされているが、「てみ

⁴ 「(よ)うとする」が表す「起こる前の状態」とは「動作に取りかかる前」である場合と「動作が達成する前」である場合の両方が考えられる。(たとえば、「通りを渡ろうとして、渡れなかった」といった場合、「渡る動作に取りかかる前」と「渡り切る前」の二つの解釈が成り立つ。) この違いには、動詞(句)の結果性(宮島(1985)など)など、動きの性質が関わると考えられ、さらなる検討が必要ではあるが、「(よ)うとする。」という述べ方が表す意味の検討を目的とする本稿では、この点は区別せず、共に「動作・作用が起こる前」とする。

る」は、この「試み」という意を「する」に加えるにすぎず、動きの局面について述べるものではない⁵。

なお、(7)(8)は、いずれも小説の地の文であり、「<かたり>のテキスト」(工藤 1995)であるため、「ル形」と「タ形」が「非過去」と「過去」というテンスの対立を有しない。この場合、「してみる。」・「する。」は共に<出来事の未生起>を含意しない。「してみる。」・「する。」が<出来事の未生起>を表すのは、以下のような場合である。

(9) 自分の置かれた立場が見えてきました。今日言われたアドバイスを真剣に {考えてみます / 考えます}。(BCCWJ: PB33_00531)

(10) 新しい薬の服用はやっぱり心配ですよ。明日病院に {きいてみます / ききます}。
(BCCWJ: OY07_02178)

(9)(10)で<出来事の未生起>を表すのは、「する。」の場合も同様である。「する。」・「してみる。」が、<出来事の未生起>を表すのは、主節の「ル形」が「タ形」との対立を持ち、「ル形」が「非過去」を表すことによる。(7)(8)が<出来事の未生起>を含意しないのは、テンスを持たない用法⁶であるためである。テンスを有する(9)(10)では、「考えてみる。」「きいてみる。」と述べた場合、「考える」「きく」という出来事は、発話時において、「過去の事実」として存在していない。発話時において「考える」「きく」という出来事は生起していないのである。

つまり、「してみる。」は、テンス、アスペクト両面において、「する。」と同じふるまいをする。「してみる。」の表す<出来事の未生起>とは、「ル形」のテンス的意味によると考えられる。「てみる。」が表す<未生起>とは、テンス的意味によるものであるため、(9)(10)のように、「未来」の出来事として述べ得る。一方、「(よ)うとする。」が表すのはあくまでも、基準時(基本的には発話時)において動作のどの局面にあるかというアスペクトの意味であるため、(11)のように「未来」の出来事として述べることはできない。

(11) *父は新しい薬の服用が心配なようで、明日病院にきこうとします。(作例)

このように、「(よ)うとする。」と「てみる。」は共に<出来事の未生起>を表すが、その意味が生じる

⁵ 「する」と「てみる」はアスペクトにおいて基本的に違いはないと考えるが、<出来事の終結>に関しては、全く同じであるとは言えない。その違いが明確になると思われる、タ形で動きが量的・時間的に持続性を要する場合を例にその違いを挙げておく。

(1) 卒業論文を {書いた / 書いてみた}。

(1)の場合、「書いた」が卒業論文を最後まで完成させたことを含意するのに対し、「書いてみた」は、必ずしも完遂を含意せず、一部を書いた場合もありうる。この違いは、(2)で顕著である。

(2) 卒業論文を {?書いた / 書いてみた} けど、完成には至らなかった。

この違いは、「てみる」が「試み」という意味を有することに起因する。「試み」である以上、結果の如何を把握していないことを意味する。それが結果的に、動きの未完遂を含意することにつながるのである。

注4で示したとおり、「(よ)うとする」が表す「起こる前の状態」という動きの局面も「動きの未完遂」の解釈も成り立つ場合があり、これも「(よ)うとする」と「てみる」の共通点の一つだと考えられる。この点については、前接する動きの性質の分析と共に更なる検討が必要である。

⁶ 寺村(1984)では物事の道理、きまりを述べる場合や物語の筋、情景描写などを「時間と無関係な確言的陳述」とされている。

背景は異なる。「(よ)うとする。」が「起こる前の状態」というアスペクト的意味によるのに対し、「てみる。」は「非過去」というテンス的意味によるのである。

本節では、「(よ)うとする。」と「てみる。」の持つ<出来事の未生起>という意味において、その意味が生じる理由の違いを、「する。」との比較を通じて明らかにした。「(よ)うとする。」が「する。」とアスペクトにおいて異なるのに対し、「てみる。」と「する。」は、テンス・アスペクト両面で同じふるまいをする。その「てみる。」と「する。」が、文法的に異なるのは、1で触れたように、「てみる。」は人称制限を持つ、という点である。

- (12) (私の娘は)一生懸命私に {?伝えてみます/伝えようとします/伝えます}。(BCCWJ : OC10_01435)(5)の一部を再掲

次節では、この人称制限について、さらに詳しく見ていくこととする。

3. 人称制限から見る「(よ)うとする」と「てみる」

本節では、主節の「ル形」における人称制限について、その違いが生じる理由を考える。

3.1 「(よ)うとする。」と「てみる。」の人称制限

1で指摘したように、主節の「ル形」においては、「てみる」と「(よ)うとする」には人称制限がある。(13)(14)は、「(よ)うとする」を、(15)(16)は、「てみる」を用いることができない。このような人称制限は「する。」にはないものである。(13)(14)は動作主が話し手、(15)(16)は動作主が第三者の場合である。

- (13) 今日はお天気も良いので気分転換にバイクで少し {出かけてみます/*出かけようとします/出かけてます}。(BCCWJ : OY15_22602) (=4)
- (14) 発作っていつまで続くんでしょう。よくわからないけど、もらった薬、早速 {飲んでみます/*飲もうとします/飲みます}。(BCCWJ : OY07_00083)
- (15) (私の娘は)一生懸命私に {?伝えてみます/伝えようとします/伝えます}。(BCCWJ : OC10_01435) (=12)
- (16) 山口小学校は新任教師でもできるプログラムを使って、六年間かけて子どもを {?伸ばしてみます/伸ばそうとします/伸ばします}。(BCCWJ : PB13_00716)

なお、主節の「ル形」には、先述のとおり、物事の道理、きまりを述べる場合(17)や物語の筋、情景描写、小説の地の文など<かたり>のテキストの場合(18)など、テンスを持たない用法があるが、これらの場合も、人称制限を持たない。⁷

- (17) 面白いもので、運というのは、どんどんつくときがあります。私たちは、それをたくさん

⁷ 「テンスを持たない用法」のうち「法則」や「例示」の用法とは、動作を一般化して述べる用法である。一般に、話し手が自身の動作を一般化するという行為は、考えにくいため、実際には、「テンスを持たない用法」で「法則」や「例示」の用法で動作主が一人称・話し手である例は、「私たち」のような一人称複数である場合である。

の人に分け与えると、消えていくのではと思います、一人で抱きかかえようとします。

(BCCWJ: LBm1_00023)

- (18) 子供たちの全員が、日本人としての特徴をそなえている—そんな気がした。そのことを確かめるために、エリコはコンソルを操作した。和規にやり方をたずねて、画面に個人データを重ねあわせてみる。(BCCWJ: LBN9_00070)

それでは、なぜ、主節の「ル形」のうち、テンスを持つ用法においては、上で見た人称制限があるのであろうか。その理由を、「ル形」という形式が持つ意味と、「てみる」「(よ)うとする」の基本義との関係に着目し、述べる。

3.2 「(よ)うとする」と人称

「(よ)うとする」の人称制限を考えるにあたって、まず、「ル形」という形式が持つ意味について整理しておく。

一般に「ル形」の言い切りの形は、「テンス・アスペクト」という面で、「タ形」と互いに対立する。さらに、「モダリティ」という面では、「かもしれない」「だろう」などの概言的モダリティと対立し、「断定」というモダリティを有する。さらに、動作主が一人称の場合に、「ル形」の言い切りの形で未来の自身の行動を断定することは、結果的に話し手の意志を表明することになる。動作主が一人称の場合に、「ル形」の言い切りの形は「意志」のモダリティを有するのである⁸。

「(よ)うとする」の人称制限は、「ル形」の言い切りの形が、動作主が一人称の場合に「意志」のモダリティを有することにあると考えられる。その仕組みは以下の通りである。

一般に、話し手の意志的動作とその動作の実行は、基本的に話し手の意志的統制のもとにある。話し手の動作について、「ル形」の言い切りの形で述べる、ということは、言い換えれば、話し手の意志的統制のもとにある動作・出来事の生起を宣言することになる。一方、「(よ)うとする。」は、そのアスペクト的意味により<出来事の未生起>を含意する。したがって、「(よ)うとする。」と言い切りの形で断定した場合、「(よ)うとする。」が持つ<出来事の未生起>というアスペクト的意味と、「ル形」という述べ方の持つ「動作を達成する意志の表明」というモダリティの意味との間でコンフリクトが起こる。「(よ)うとする」が動作主に一人称をとれないのはこのためである。

具体的にいえば、(19)において、「出かけようとする。」は、「出かける」という動作が生起していないことを断定する。しかし、(19)は動作主が話し手であるため、ル形で言い切りの形で述べることは、話し手が「行く」という意志を持っていることを示すことになる。両者の意味がコンフリクトを起こすため非文となるのである。

- (19) 今日はお天気も良いので気分転換にバイクで少し 出かけてみます/*出かけようとし

⁸ 「ル形」の言い切りの形と「意志のモダリティ」との関連については森山(1990)に詳しい記述がある。

す}。(BCCWJ: OY15_22602)(=(4))

なお、「(よ)うとする。」が表す<未生起>とは、動作の局面の客観的な描写にすぎず、「てみる」とは異なり、動作主の意図とは無関係である。したがって、(20)のように、「意図」を持ちえない無生物主語とも共起し、動きの局面を述べることができる。

(20) 体は今までと同じエネルギーを保管 {しようとします/*してみます。}

(BCCWJ:OC09_02948)

3.3 「てみる」と人称

次に、動作主に三人称をとれないという「てみる」の人称制限について考える。これは、「てみる」の基本義に起因すると考えられる。

「てみる」が「する」と異なるのは、「てみる」が、高橋(1976:142)で「もくろみ動詞」とされているとおり、「試み」という意味を有するという点である。「てみる」は「試み」の動きであることを表す、という点である。具体的には、吉川(1975)の指摘のように、「てみる」を伴うことで、「あることを知るために／ある動作をした結果の状態を知るために動作をすること」を表す。「する」との違いが文法的な違いとして現れるのは、石川(1985)が挙げるように、間接疑問文との共起の可否においてである。

(21) 山田さんが来るかどうか、電話を {かけてみます/*かけます} (石川(16)(17))

この点について石川(1985)は「てみる」には「知るために」「知りたいから」とか「調べるために」という意図が隠されている(下線は引用者)とする⁹。本稿では、この「てみる」の背後にある「意図」が人称制限と関わると考える。「してみる。」と言った場合、「ル形」という述べ方によって、事態を断定すると共に、「してみる」という形式によって、動作主が「動作の結果を知りたい」という意図を持っていることを含意する。つまり、動作の実行を断定するとともに、動作主が「行為の結果を知りたい」という意図を(発話時以前に)持っていることを断定するのである。

ここで思い出されるのが感情形容詞や「たい」など感情を表す形式の「ル形」の言い切りにおける人称制限である。一般に、感情形容詞や「たい」は、感情主体が三人称の場合、「ル形」の言い切りの形で述べることができない。話し手は感情主体がどのような感情を持っているか断定できないためである。

(22) 彼は {*うれしい／うれしがっている／うれしいようだ／うれしかった／うれしいのだ}。

(作例)

(23) 彼は {*行きたい／行きたがっている／行きたいようだ／行きたかった／行きたいのだ}。

(作例)

⁹ 「てみる」は高橋(1976)で「もくろみ動詞」とされているが、この「もくろみ」とは、この「動作の結果を知りたい」という意図であると考えられる。同じく「もくろみ動詞」とされる「ておく」も、「行為者を基本的に一人称に限る」ことが益岡(1992)、菊地(2009)で指摘されている。菊地(2009)は、「ておく」には「後まで見越したうえで行う」という「意図性」が込められていることをその原因とする。「意図」の内実は異なるが、「てみる」と「ておく」は共に「意図」が込められていることが人称制限を生む点は共通している。

このような人称制限は、「てみる」の人称制限と重なり合う。動作主が三人称の場合、動作主の動作は話し手の意志的統制のもとにはない。さらに、動作主が「行為の結果を知りたい」という意図を持っているかどうか、話し手は把握できず、断定をすることはできない。したがって、「てみる」という形式が持つ、「(行為の結果を知りたいという)意図の表明」という意味と、「ル形」による「断定」の間にコンフリクトが起きるのである。

無情物を行為者とする場合、そもそも「(知りたいという)意図」を持ちえないのであるから、当然、「てみる。」は共起することはできない。

(24) リバウンドですが、ある程度食べるのをやめても、体は今までと同じエネルギーを保管{しようとしてます/*してきます}。(BCCWJ: OC09_02948)

「意図」を持ちうる有情物を行為者とする(25)で、「てみる。」が不自然なのは、「私の娘」が「結果を知ろう」という「意図」を持っていることを、「話し手」が「ル形」の言い切りの形という述べ方で断定していることによる。

(25) (私の娘は)一生懸命私に{?伝えてみます/伝えようとしてます}。(BCCWJ: OC10_01435) (= (12))

動作主が「結果を知ろう」という「意図」を持っているかどうかは、動作主の内的状態であり、本来話し手が断定しえないものである。したがって、「してみる。」は三人称主語をとることができないのである。

なお、(26)(27)のような働きかけの表現は、動作主に二人称をとる表現であり、聞き手がその行為を実行することを話し手が期待していることが前提にある。

(26) よかったら、これ、{食べてください/食べてみてください}。

(27) 先生に {聞いたら/聞いてみたら} どうですか。

「てみる」を用いた場合、聞き手が「意図」を持つことを期待していることになる。話し手は他者の「意図」を断定しえないが、それを期待することは妨げられない。(26)(27)で「てみる」を付与した場合、「試み」の動きとして勧めることにより、話し手がその結果の如何を把握していないことを含意し、働きかけの「やわらげ」という表現効果を持つと考えられる。

以上、本節では、「てみる。」と「(よ)うとする。」に人称制限が生じる理由を明らかにした。

4. 「乗ろうとする方はいすを探してみる」の不自然さをどう説明するか—「てみる」・「(よ)うとする」と視点

以上の考察を踏まえ、冒頭の(1)に関し、「探してみる。」の不自然さをどのように説明するべきか、考察を加える。

(1) 降りる人の迷惑も構わずに多ぜいの人々が混んでいる車の中に押し入ろうとする。乗ろうとする方は力いっぱい押しながらどンドン中の方まで進んでいすを探してみる。(→探そうとする) (アメリカ、3) (市川 1997)

(1)では、「探す」の動作主が三人称である。これが「てみる」の人称制限に抵触するのは、上で見た

とおりである。ただし、この不自然さの要因の説明としては、人称制限に留まらず、話し手がどこからこの出来事をみているのか、「視点」の問題も合わせて説明する必要があると思われる。

人称制限と視点の関わりについては、いくつかの文法現象において従来の研究でも触れられてきた。蓮沼(1993)は事実的用法における「たら」と「と」の人称制限の異なりを例に、「たら」と「と」の視点の異なりを指摘する。

- (28) あるとき坂内さんが彼の家へ「乳をしぼるところをみせてくれ」といって遊びに{?行ったら/行くと)、躍り上がるようにして喜んだ。(蓮沼 1993(1)(1))

(28)で「たら」が不自然なのは、(28)の前件が話し手以外の意志的な動作であり、それが引用標識なしで表されていることによる。事実的用法の「たら」は「話し手が後件の事態を実体験的に認識する関係」を表すものであり、それが、三人称の動作主を排除するのである。一方、(28)で「と」は自然であるのは、「と」が「話し手が外部からの観察者の視点で語る」ことによる、とする。つまり、「たら」は動作主に視点を置き、内側から出来事を眺める表現であるのに対し、「と」は観察者として外側から眺める表現である、といえる。そして、そのことが「たら」は動作主に一人称を、「と」は三人称をとる、という人称制限と関わるのである¹⁰。

岩崎(1996)は「というので」と「というのに」について、(29)と(30)のような異なりがあるのは、「の」で節における「という」と「のに」節における「という」が異なる視点を示すことによると説明する。

- (29) 雨が降った {ので/*というので)、地面がぐちゃぐちゃになった。(岩崎 1996(11))
(30) 台風が近づいている {のに/というのに)、風ひとつ吹いていない。
(岩崎 1996(12))

岩崎(1996)は「ので」、「のに」は共に、事態が主節時に真であると確定しており、かつ話し手が発話時に真であると認識している点は同じであるとしている。両者の視点が異なるのは、(29)(30)のように「という」を伴った場合である。「ので」節における「という」は「主節時における主節の動作主の視点」を示し、「のに」節における「という」は「話し手の主節時における第三者的視点」を示すとする。これを上述の蓮沼(1993)の議論に重ね合わせると、「というので」は、内側から出来事を眺める表現であるのに対し、「というのに」は観察者として外側から眺める表現である、といえる。(29)(30)は主節の事態が物理的現象であるため、動作主に視点を置き、内側から眺めることを示す「というので」は不可となるのである。

定延・マルチュコフ(2006)、定延(2006)で挙げられている内部状態の表現における人称制限も、こういった視点の違いを反映するものである。内部状態を述べる場合、(31)のように人称制限がある。他者

¹⁰ 非状態形の「たら」節(「ていたら」)において、前件が話し手の視点を代表し、後件が話し手の視点からの観察内容を表すために、人称制限があることは田窪(1993)でも指摘されている。(2)は第三者が動作主であり、話し手の共感視点をとりにくいため、不可である。

- (1) その部屋で本を読んでいたら、美智子が入ってきた。(田窪(1993) (6))
(2) ?あの男が本を読んでいたら、美智子が入ってきた。(田窪(1993) (16))

の内部状態について述べる場合、つまり感情・感覚主体が三人称の場合、(32)のように「ている」を伴って、観察に基づく情報であることを表さなければならない¹¹。

(31) {私/??彼}は痛みを感じる。(定延・マルチュコフ 2006(4)a(5)a)

(32) 彼は痛みを感じている。(定延・マルチュコフ 2006(5)b)

このように、内側からの視点で述べる場合と、観察者として外側から述べる場合とは、言語的に区別されるのである。

3.1 でみた「てみる」と「(よ)うとする」の人称制限は、この視点の異なりと関連づけて考えることができる。すでにみたとおり、「(よ)うとする」は「動作・作用が起こる前の状態」を指す。一方、「てみる」は「ためしにする動作」を表す。「てみる」がこのような意味を有するのは、行為に臨む時点で、動作主が行為の結果を知らないという前提がある。つまり、「(よ)うとする」と「てみる」の違いとは、「(よ)うとする」が「動作・作用が起こる前」という「状態」を述べるのに対し、「てみる」が「結果を知らない」という「動作主の認識」を述べるという点である。

この違いが、「てみる」と「(よ)うとする」の視点の異なりを生む。「てみる」は、動作主の「認識」の問題を述べるのであるから、話し手は動作主に視点を置き、動作の内側に入って「行為の結果」をみる、と言える。動作の内側からみられるのは、動作主自身に限られる。したがって、「てみる」は、動作主を話し手(一人称)に限るという人称制限が生まれるのである。一方、「(よ)うとする」は、あくまでも「状態」を述べているのであるから、視点は動作の外側の観察者にあると考えられる。観察者である話し手が、自身の行為を外側から述べるのは不自然に感じられるため、動作主は話し手以外に限るという人称制限が生まれるのである。

(1)では、話し手は、電車を乗り降りする人々を外側から眺める観察者として出来事を述べていると思われる。

(1) 降りる人の迷惑も構わずに多ぜいの人々が混んでいる車の中に押し入ろうとする。乗ろうとする方はかいっぱい押しながらどんどん中の方まで進んでいすを探してみる。(→探そうとする)〈アメリカ、3〉(市川 1997)

ここで、「探してみる。」とした場合、話し手が動作主である「乗ろうとする方」の視点に立ち、「探す」という動作を内側から眺めることになる。あたかも共にいすを探しているかのように感情移入をした叙述となり、「乗ろうとする方」に視点を置く積極的な理由がない限り、不自然になるのである。

このように、「てみる」と「(よ)うとする」は、事態をどこから眺めるかといった視点の異なりがある。「てみる」は内側から、「(よ)うとする」は外側から事態を眺めているといえる。両者の違いは、上で見た、観察に基づく情報であるか否かを言語的に区別するという一連の現象の一つと考えることができるだろう。

¹¹ このことは、定延・マルチュコフ(2006)、定延(2006)が「ている」を「エビデンシャル」と主張する根拠のひとつである。

5. おわりに

以上、主節の「てみる」と「(よ)うとする」の言い切りの形における重なりと異なりとを考察した。

2 では両者が共通して持つ<出来事の未生起>という意味が生じる背景の異なりを明らかにした。「てみる。」は「非過去」というテンス的意味、「(よ)うとする。」は「動作・作用が起こる前」というアスペクト的意味により、<出来事の未生起>という意味を有する。

3 では、「てみる。」と「(よ)うとする。」の人称制限について、その要因を明らかにした。両者の人称制限は、「ル形」の言い切りの形が持つモダリティ的な意味と、各形式の基本義との間に起こるコンフリクトが原因である。

さらに、4 では、人称制限と視点との関係について述べた。「てみる。」は動作主の視点で、「(よ)うとする。」は観察者の視点で述べるという、視点の異なりがある。

本稿では、両表現の混同の原因となる重なりを明らかにしたうえで、「ル形」の言い切りの形が持つテンス・アスペクト的意味、モダリティ的意味の考察を通して、「てみる。」と「(よ)うとする。」を考察した。そして、「てみる。」と「(よ)うとする。」の異なりには、人称制限、さらには、視点の違いが関わることを明らかにした。両表現の視点の違いは、内側からの視点で述べる場合と、観察者として外側から述べる場合とを言語的に区別する、という言語現象の一つとして位置づけることができるものと思われる。

参考文献

- 石川守(1985)「「～てみる」と「～ようとする」に関する一考察」『語学研究』41、pp.29-55、拓殖大学。
- 岩崎卓(1996)「ノデの視点とノニの視点—トイウノデとトイウノニから—」『現代日本語研究』3、pp.55-71、大阪大学現代日本語学講座。
- 市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』イセブ。
- 金田一春彦(1976)「日本語動詞のテンスとアスペクト」、金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』pp.27-61、むぎ書房。
- 菊地康人(2009)「「ておく」の分析」『東京大学留学生センター教育研究論集』15、pp.1-20
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房。
- 定延利之、アンドレイ・マルチュコフ(2006)「エビデンシャルリティと現代日本語の「ている」構文」、中川正之・定延利之(編)『シリーズ言語対照<外から見る日本語>第2巻 言語に現れる「世間」と「世界」』pp.153-166、くろしお出版。
- 定延利之(2006)「心内情報の帰属と管理—現代日本語共通語「ている」のエビデンシャルな性質について—」、中川正之・定延利之(編)『シリーズ言語対照<外から見る日本語>第2巻 言語に現れる「世間」と「世界」』pp.167-192、くろしお出版。
- 高橋太郎(1975)「すがたともくろみ」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』pp.115-153、むぎ書房。
- 田窪行則(1993)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志(編)『日本語の条件表現』pp.169-183、

くろしお出版.

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版.

蓮沼昭子(1993)「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志(編)『日本語の条件表現』pp.73-97、

くろしお出版.

益岡隆志(1992)「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて」文化言語学編集委員会(編)『文化言語学 その提言と課題』pp.546-532、三省堂.

宮島達夫(1985)「「ドアをあけたが、あかなかった」—動詞の意味における<結果性>—」『計量国語学』14-8、pp.335-353.

森山卓郎(1990)「意志のモダリティについて」『阪大日本語研究』2、pp.1-19.

吉川武時(1975)「「～てみる」の意味とそれの実現する条件」『日本語学校論集』2、p.36-51 東京外国語大学 外国語学部附属日本語学校.

Seiichi Makino and Michio Tsutsui(1986) *A dictionary of basic Japanese grammar*. Tokyo: The Japan Times